

2021年横浜ナザレン教会降誕節第六主日礼拝

「神の造る新しい家」

ルカ福音書第20章9節から19節

【聖書テキスト】

ルカによる福音書 20:9 イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。10 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。11 そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。12 更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。13 そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14 農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』15 そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。16 戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあつてはなりません」と言った。17 イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』18 その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

1 主イエスの権威について

今日の聖書テキストの前、第20章の1節から8節で、主イエスは、祭司長達や律法学者達と、権威について議論しました。境内で民衆に教える主イエスに対して、祭司長達や律法学者達、長老達という権威者達が「何の権威があつてこんな事をするのか」と詰め寄ります。その時、主は「ヨハネの洗礼は神からのものか、人からのものか」と彼らに問い返されます。そのようにして、彼らが、神の権威により頼み生きているのではなく、自分達の権威によりかかりこれを守ろうとして生きている事を明らかにされました。その後、主イエスが民衆に向かって語られたのが、今日の譬え話です。ですから、この譬え話の隠されたテーマは、「主イエスの権威」。主イエスの権威は、主イエスは何者か？という事に繋がり、更には、主イエスに従って生きる事とはどういう事か？主イエスに従って生きる者達が造り上げる共同体とは、どのようなものかにつな

がっていくと思います。

## 2 葡萄園と農夫の譬え話

主イエスは、人々に多くの譬えを語っています。譬え話には、聞く者が「これはいったい何を示しているのだろうか」と考えさせる力、聴く人を巻き込む力があります。イエス様は、律法学者達や祭司長達など権威者達の意見を鵜呑みにするのではなくて、一人一人に考えて欲しかったのだと思います。そんななさり方も主イエスがどのようなお方を示しているようです。しかし、この最後の譬え話の内容は、今までにないほど衝撃的です。

聖書の中で「葡萄園」といえば、神の民、イスラエルのことを指します。今日の譬え話の中の主人は、天の御神。神はご自身の手で神の民、イスラエルを造り、豊かな実を結ぶように、入念な手入れをなさいました。そうして、神の民を人間の指導者達に委ねて旅に出られました。現代の私たちからすれば、唐突な旅のようですが、これはよくある事だったようです。当時のギリシャ・ローマ世界の地主達は農園を農夫達に貸し出し、自分は遠くの都会に住む。そして、家来を農園に派遣して収穫を徴収するのが一般的であったようで、民衆もよく知っていました。

この譬え話には、イスラエルの歴史、神と神の民の歴史が巧みに語り込まれています。旧約聖書の歴史物語の優れたダイジェスト版のよう。神に導かれてエジプトを脱出し、カナンの地に定着したイスラエルの人々。その初期には、王様がいませんでした。敵が攻めて来たり、イスラエルの部族間で大きい揉め事が起こる度に、神が指導者を選んで立ててくださり、その人が人々を率いて戦い、政を行ってイスラエルを治めた様子が士師記に描かれています。しかし、そうこうするうちに、イスラエルの周りの小さい国々でも、王様を立て国としてまとめ、強い軍隊や豊かな富を持つようになります。王様のいないイスラエルだけ、おいてけぼり。これに焦った人々は、「私達にも王をください」とイスラエルを治めていた預言者・サムエルに頼み込みます。サムエルは神の代わりに人間の王をいただく事がいかに危険かを人々に説きますが、彼らは納得しません。神は民の願いを聞き入れ、イスラエルの最初の王としてサウルを選ばれ、次にダビデを選ばれます。そのダビデ王が、12部族をまとめて強力な統一国家をつくりました。主イエスの時代より1000年前の事です。ダビデは、罪も犯しましたが、その度に悔い改め神と共に歩んで信仰者の見本となります。が、ダビデの子孫はどうもいけません。神の権威ではなく、自分の権威、権力を増し加える事ばかり考えるようになり、弱く小さい者達を蔑ろにする政治を行うようになります。不思議な事ですが、王がそのようになり始めたソロモン王の治世の後半辺りから、神が王に直接的に語りかけることがなくなりま

す。まるで今日の譬え話の長い旅に出る主人のようです。

けれども、神はご自身の民を見捨てたわけではありません。天の御神は、預言者を選び出して、ご自身の言葉を与え、王など指導者達に伝えさせます。ですが、預言者の声に耳を傾ける指導者は、ごくわずか。多くの預言者が、王や貴族などによって迫害されました。中には殺害された預言者もいました。主イエスの直前に現れた洗礼者ヨハネも、ヘロデ・アンティパスに殺されました。

ですから、今日の譬え話で、神である主人からぶどう園を借りて管理している農夫達は、人間の指導者。主イエスの時代でいえば、まさに祭司長や律法学者、長老達。そして、天の御神である主人が農園に送った僕は、預言者。ある牧師は、主人が、葡萄園を農夫達に全て委ねて、長い旅に出た、というところに、天の神さまがどのようなお方であるかが、よく現れている、天の神さまは決して私達人間をがんじがらめに縛り付けるお方ではない、自由にさせてくださるお方なのだ、と話していましたが、その通りだと思います。神さまは、指導者達を信頼して、ご自身の民を委ねたのです。しかし、彼らは、神のものを自分達のものだと勘違いし、神からの預言者達をひどい目に合わせてしまいました。一人目を袋叩きにして空手で帰し、二人目は袋叩きにしたうえで侮辱し勿論何も持たせずに帰す、三人目は、傷を負わせて空手で帰す。そして、遂に、主人が「私の息子なら敬ってくれるだろう」と送った一人息子さえも殺してしまいます。「跡取り息子がいなくなれば、葡萄園は自分達のものとなるから」。当時の法律では、地主が、後継ぎなく、亡くなった場合は、小作人達に農地が分け与えられたようです。彼らは、欲に目がくらみ、一人息子を葡萄園の外に放り出して殺してしまいます。この一人息子が、イエス・キリストである事は明らかです。一人息子を殺された主人は葡萄園の農夫達を殺し、他の人たちに葡萄園を与える事になります。つまり、神は、神の民イスラエルを捨て他の人々を神の民とする、とこの譬え話は語っています。「他の人たち」というのが、キリスト・イエスを信じた人々とその教会である事を、私達は知っています。

### 3 神の権威に従って生きる

しかし、譬え話を聞いた人々は、「そんな事があってはなりません」と言います。16節の「彼ら」は、律法学者や祭司長達ではなく、話を聞いていた民衆です。そして、その反論の言葉は「断じてそんな事はあり得ない」と訳してもよい断固とした反対の言葉です。人々は、これ以上ない強い調子で、主イエスの譬え話が示す事に反対します。私だって、その場にいるユダヤ人だとしたら、この譬え話に反対すると思います。神に愛され、神に助けられ、律法をあれほど熱心に守っていた神の民であるイスラエル、信仰共同体が神の僕を虐待し、ましてや神の独り子を、神を殺すとは、あり得る筈ないではありませんか。現

代で言うならば、教会が、毎週礼拝を熱心に守っているキリスト者達が、神に根強く反抗し続け、神を殺そうとし、そうして遂に神が教会を見捨てる、という話しになります。そんな話しを聞いたら、皆さんだって「そんな事あるわけない！」と声を大にして立ち上がるでしょう。それほどに衝撃的な内容です。

しかし、実際に主イエスの十字架の出来事は起こりました。神の御子を殺すとは、神を殺す事と等しいでしょう。神の民、信仰共同体が神を殺しました。この譬え話を、過去に起こったユダヤ人たちの過ちの歴史だ、我々、キリスト者は関係ない！とする事は決して出来ません。教会は、長い間、この譬え話を、主イエスを殺したユダヤ人たちの有罪宣告のように読んで、差別し迫害してきました。その歴史が、ナチス・ドイツのホロコーストに繋がります。ですから、私達、新しい神の民であるキリスト者達こそ、この譬え話を自分達への教訓として聴く必要があります。たとえキリスト者であっても、たとえ教会であっても、神の権威ではなく、人の権威を求めていけば、必ず、この農夫達のようになる、気づかぬうちに神を殺してしまう…という事を主は、今、まさに神を礼拝している私達に語っておられるのです。

考えてみれば、教会の外、この世ではいつもそうです。人の権威が重んじられ、神は殺され続ける、無視し続けられるのです。与党の国会議員がPCR検査で陽性になったが、無症状にも拘らず即座に入院できた、全国で三万人以上とも言われる入院できない人々を飛び越えた、と話題になっていますが、これだって、病院や保健所が政府与党の有力者という人間の権威を第一に考えたからであり、この世では日常茶飯事に行われていることです。そして、このような、神を無視する世間のあり方は、イエス・キリストを信じる信仰共同体にも忍び込みます。誰あろう私達一人一人が持ち込むのです。現に、著名な牧師や神学者など優れた指導者のいる教会を「◎◎牧師の教会」「△△先生の教会」と呼ぶことがあります。牧師達が真っ先に呼びます。キリストの体なる教会ですから、本来はそんな呼び方などある筈ないのですが、私たちは無頓着に呼んでしまう。私達がどんなにたやすく神を忘れ、人間の権威に寄りかかってしまうかは、驚くほどです。私達の心の中には、神を求めるのではなく、人の権威を求める傾向がぬぐいがたくある証だと思えます。

イエス様は、聖書は、そんな私達人間のちぐはぐな現実をよくご存知でした。イエスさまが、「そのような事があってはなりません」と声を挙げた民を見つめて語った言葉からそれが判ります。この時、主イエスはどのような気持ちで人々を見つめていたのでしょうか。数日後には、彼ら民衆によって自分が十字架に架けられる事をご存じだったイエス様。その眼差しには、深い慈しみと悲しみが満ちていたと思えます。彼らに心を込めて語り掛けられます。「何故、あなた方、神の民が、神を殺す事となるのか?」、詩編118篇から引用して語りかけます。

「家を建てる者の棄てた石、これが隅の親石となった」人の目に立派に映る石、見栄えよく映る石、人が用いたがる石とは、人間の権威でしょう。人が喜ぶ人間の権威を、神は決して喜ばれないし、お用いにもならない。寧ろ、人間が捨ててしまうような、目を留めることもないような石こそ、新しい家の礎として使われる、と主イエスは仰っています。ルカは、大胆にも、別の個所で「人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」という主イエスの言葉を記しています。だから私達は、自分の目や思いを先ず疑うことから始めたいと思います。それは本当に神の権威か？何が神の権威なのか、常に新たに祈り求め考えてみよと、主は仰っているのだと思います。

そうしなければ、神の親石がどのようなものかはわからない。何も祈り求めず考えずにいて、この要石に躓く人は木っ端みじんにされるし、神に手をかけようとして罪を犯せば、要石が上から落ちれば人を押しつぶす、つまり、神の親石には、人を審く力があり、不用意にこれを扱うものは、審き滅ぼされるのです。人間に都合のよい事だけをするのは、神ではなく、人間が造り出した偶像です。神が人を作るのではなく、人が神を造り出す、逆転もいいところ。人間の権威を造り出し、これに頼るとは、偽りの神、偶像の神を造り出す偶像礼拝です。

確かに偶像は、ひと時の安心を私達に与えるでしょう。ですが、同じ権威に服さない人たちを排斥し、互いに憎み合う道へと私達を駆り立てます。そうして神の親石と衝突する。人の権威を求めて行き着く先は死であり、滅びなのです。しかし、審く力のない偶像に、人間の権威に、人を滅びから救い出す力はありません。神の要石には、人を審く力があり、そして、裁いて滅ぼした私達を新たに造り上げる力もあります。この神の要石の上に、新しい信仰共同体はつくり上げられるのです。この要石こそ、キリスト・イエス、私たちの救い主です。その真理を神は考えられない方法で示してくださいました。ご自身を殺そうとする罪人の為に、農夫達の為に、御子を十字架につけ、三日後に甦らせるという途方もないやり方で。そうして私達に際限ない愛の権威を示されたのです。私達がイエス・キリストを親石とできる為に、です。

#### 4 神が造る新しい共同体

そして、私達一人一人に見えないキリスト、聖霊を注いでくださいます。私達人間だけでは、新しい偶像、偽りの神、人間の権威をつくりあげ、それに従ってしまうからです。私達一人一人が、天の御神に祈り求めつつ聖書を読み、そこから導きを得て新しいものを選び取っていく事ができて初めて、新しい共同体を造り上げる事ができるから。今も、神は聖霊をお与えくださり、礼拝へと招き続けていてくださいます。そうして新しい家を造り上げておられます。

カトリックの司祭であるヘンリー・ナウエンという人が、この新しい共同体について、味わい深い言葉を語っています。「たった一人のかけがえない存在同士が会う、これこそが共同体です。共同体は、私達がもはや一人ぼっちではないという場所なのではなく、私達が互いにたった一人である事を尊重し、守り、そして敬意をもって迎え入れる場所です。『一人ぼっちであること』から『たった一人のかけがえない存在』へと変わる時、私達は他の人々もたった一人のかけがえない存在という事を喜ぶことができるでしょう。(略) 私達が色々な形でたった一人である事は、共同体という家の屋根を支える強くまっすぐな柱のようなものです。このように、たった一人であるという事は共同体を常に強めるのです。」

ナウエンが、「共同体という家の屋根を支える強くまっすぐな柱」つまり、大黒柱と言ったのが、今日の主の言葉で言えば、「隅の親石」と言えます。たった一人のかけがえない存在、と私達が深く知り、そこに根を下ろすとは、私達がイエス・キリストの十字架によって神に贖われた存在だと深く知りそれを生きる基とする事です。私たちは、罪赦された罪人です。神よりも自分たちの権威を求める罪人であるからこそ、十字架と復活の主イエス・キリストと深く結びつけるようにと、聖霊を希うのです。神は必ず応えてくださいます。

考えてみれば、主が語る譬えに出て来る農夫達は、一人ではありません。グルになって、神からの使いをやっつける、徒党を組み、神を殺そうとしますが、そのようにして実は自分たちを殺しているのです。命の造り主である神との関係を絶っているのですから。一方、神の使い達、僕も一人息子も、一人です。かけがえない存在と自分を深く愛してくださる神と深く結びついた一人一人です。彼らは、農夫達一人一人もかけがえない者として呼びかけました。しかし、欲得づくでグルになった彼らには、それが分からず、自分達の利益を奪う外から来た者だと考え、排除したのです。人間の造る集まりは、農夫達と同じように、グルになって自分達と異なる人々を排除しようとしています。神の造る共同体は、そうではありません。一人一人がイエス・キリストとしっかり結びついた共同体は、自分達と異なる人々をも受け入れる事ができます。自分達もまた一人一人異なるが尊い存在だと知っているからです。神は、そのような一人一人、イエス・キリストと深く結びついた一人一人を用いて新しい家、ご自身の家を造ってください。◎◎先生とか、◎◎牧師などの人の権威に頼ってグルになるのではなく、一人一人が異なる存在として、キリスト・イエスとしっかりと結びつき、一つの家、神の家を造り上げる部分として用いてもらうのです。

今週も七日の旅路が始まります。人ではなく、神により頼み、キリスト・イエスと深く結びついて歩んで行きたいと心より願います。そうしてこそ、私ど

もの横浜ナザレン教会を、神の建て上げる新しい家としていただけます。罪人である私たちをも聖めて用い、神の家のかけがえのない一部としてくださる天の父なる御神を賛美してやみません。